徳島大学教養部紀要
(人文・社会科学)
第十五巻 別刷
1980

「ニーベルンゲンの歌」と「哀歌」

石川栄作

徳島大学教養部紀要
（人文・社会科学）
第十五巻　１９８０

「ニーベルンゲンの歌」と「哀歌」

石　川　栄　作

Das Nibelungenlied und Die Klage

Eisaku ISHIKAWA

Zusammenfassung

Man sagt, die Fassung C des Nibelungenlieds sei eine mit Bedacht vorgenommene Bearbeitung der Fassung B. Wenn wir diese Fassung C mit der B vergleichen wollen, müssen wir zugleich die „Klage" in Betracht ziehen, die nach Entstehung und Inhalt aufs nächste mit den beiden Fassungen zusammenhängt. Die inhaltlich-chronologische Beziehung der 3 Dichtungen wird hier beobachtet.

1) Der Nibelungendichter B erzählt die Vorgänge mit starker Zurückhaltung und vor allem mit dem Streben, neutral zu bleiben und Gerechtigkeit nach allen Seiten zu üben: er erkennt einerseits Kriemhilds Treue an, negiert anderseits ihren schrecklichen Racheakt.

2) Der Bearbeiter C bestrebt sich dagegen immer wieder, Kriemhild zu entlasten: es geht ihm sichtlich darum, Kriemhild zu entschuldigen, und zugleich alle Schuld Hagen aufzubürden.

3) Diese tendenziöse Wertung, Kriemhild zu entlasten, Hagen dagegen zu belasten, ist in der „Klage" noch stärker und aufdringlicher als im Nibelungenlied C.

Das innere Verhältnis von der 3 Dichtungen unter dem Gesichtspunkt der verteidigenden bzw. tadelnden Tendenz kann daher nur in der Reihenfolge gesehen werden: Nibelungenlied B→ Nibelungenlied C→„Klage". Man soll aber dieses innere Verhältnis mit der chronologischen Reihenfolge nicht gleichsetzen, weil das inhaltliche Verhältnis nicht notwendigerweise Ausdruck einer zeitlichen Aufeinanderfolge zu sein braucht. Diese chronologische Frage müssen wir aber leider ungelöst bleiben lassen.

Vielmehr noch wichtiger ist es hier, die Eigentümlichkeiten der 3 Dichtungen klar zu machen: im Gegensatz zu dem Nibelungenlied B, dessen Verfasser ein tragisches Geschehen in der unauflöslichen Verschlungenheit von Verhängnis und Schuld entwickelt, versucht der Bearbeiter C die Nibelungentragödie als Folge menschlicher Verfehlung zu erklären. Die Fassung C ist also die „mittelalterlichere" von den beiden Fassungen, indem sie die heroisch-pessimistisch-tragische Weltsicht einschränkt. Echt „mittelalterlich" ist aber die „Klage", die die christliche Tendenz enthält: hier ist das Bestreben noch sichtbarer, das unheilvolle Geschehen als gerechte Strafe Gottes für die menschliche Schuld zu deuten.

序

「ニーベルンゲンの歌」は厳密な意味においていわゆる「民衆叙事詩」(Volksepos) ではなく、一つの「宮廷的騎士叙事詩」(ein höfisch-ritterliches Epos) であるということは、私がこれまで「ニーベルンゲンの歌」に関する研究[1] で特に強調して述べてきたものである。しかし、私はそ

1) 拙論：「ニーベルンゲンの歌」――宮廷文学作品としての一考察――（「かいろす」第 14 号、昭和51年10月）
拙論：キューレンベルクの詩人と「ニーベルンゲンの歌」（徳島大学教養部紀要――人文・社会科学――第14巻、1979年）

の際、「ニーベルンゲンの歌」は宮廷的特徴を有しているにもかかわらず、当時のそのほかの宮廷文学作品とはかなり異なっていると言わなければならないと述べた。すなわち、「ニーベルンゲンの歌」の本質は古代ゲルマンの精神が潑剌と脈動していることであり、この点で宮廷文学の中にあって注目すべき特異性を有する作品であるということなのである。事実、特に「ニーベルンゲンの歌」第一部においては顕著に英雄主義的・悲観主義的世界観が展開し、不死身の英雄ジーフリトも、古代ゲルマンの英雄さながらに、必ず滅びなければならないという暗い「運命」にさらされていたのであり、また第二部で展開される「忠誠」の共同体精神も窮極的には悪魔の手にゆだねられて、悲劇的な結末を招来することとなっているのである。文豪ゲーテ[2]も1827年版のカール・ジムロック訳でこの叙事詩を読んだとき、「モチーフは徹頭徹尾異教的（durchaus grundheidnisch）」であり、「神の支配する痕跡もない（keine Spur von einer waltenden Gottheit）」と感想を述べているくらいである。要するに、「ニーベルンゲンの歌」の本質には、成立当時（13世紀初頭）の宮廷文学からの強い影響もさることながら、取り扱われた古代ゲルマンの素材に特有な精神が忠実に残されていると言うことができるのである。

しかし、私はこの「ニーベルンゲンの歌」に関する研究をこれまで「写本 B」[3]という最も原型に近いと言われている代表的な写本によって進めてきた。ところが、写本によってはその文学的特質もかなり異なっていることをここで認めなければならない。写本 B の改作と見なされている「写本 C」[4]の特質がその顕著な例であるが、この写本 B に対する写本 C の特色を明らかに示すことも、すなわち、本稿の目的の一つなのである。

ところで、この「ニーベルンゲンの歌」の両写本を比較考察してゆく際に見落としてはならない当時の作品がもう一つ挙げられる。それは、我が国においては全くと言ってよいほど知られていないが、宮廷的押韻二行連句で書かれた4000詩行以上から成る一つの詩作であり、「哀歌」(diu klage)[5]と呼ばれている作品である。この表題は、すなわち、その作品の最後の詩行（V. 4322）で „ditze liet heizet diu klage.“（この歌は「哀歌」と言う）と語られていることに由来するのであるが、この表現はすぐさま「ニーベルンゲンの歌」の最後の言葉を思い出させる。すなわち、「ニーベルンゲンの歌」写本 B (2379, 4) では „daz ist der Nibelunge nôt.“ となっており、写本 C (2440, 4) でも „daz ist der Nibelunge liet.“ と締めくくられているのである。[6] しかし、この「哀歌」という作品は、その最後の詩行でもって「ニーベルンゲンの歌」をすぐさま連想させるだけではなく、その中に語られている内容から言っても、「ニーベルンゲンの歌」と切り離

2) Meyers Klassiker-Ausgaben, Goethes Werke, Bd. 26, Das Nibelungenlied. S. 417.

3) Helmut de Boor: Das Nibelungenlied, 20. Auflage, F. A. Brockhaus, Wiesbaden 1972. 本稿においても写本 B にはこの版を使用する。

4) 本稿では写本 C に次のテクストを使用する。Friedrich Zarncke: Das Nibelungenlied, Max Niemeyer, Halle 1920.（但し、詩節番号は A. ホルツマンを参照）

5) 本稿では次のテクストを使用する。Karl Bartsch: Diu Klage mit den Lesarten sämmtlicher Handschriften, F. A. Brockhaus, Leipzig 1875.

6) このため写本 B を Nôt 本、写本 C を Liet 本と呼ぶこともある。

すことができないほど密接に関連しているものであり、また事実「ニーベルンゲンの歌」と一緒にしてのみ理解されうるものなのである。それでは、一体この「哀歌」という作品は「ニーベルンゲンの歌」写本 B 及び写本 C とどういう関係にあったのであろうか。以下、その三つの作品の内容的関係並びに成立年代的関係をめぐって考察を進めてゆくつもりであるが、しかし、それらの作品の成立年代——決定的な確証となるものがないので正確には決められない——を推定することが本稿の目的ではなく、むしろ本稿の主たる目的はそれら三つの作品の文学的特質を対照的に明示することにあるということをここで前もって言っておかなければならない。

1. 「哀歌」の内容

序で少し触れたように、「哀歌」は内容から言っても「ニーベルンゲンの歌」と切り離すことができないほど密接に関連しているものであり、また実際に「ニーベルンゲンの歌」と一緒にしてのみ理解されうるものであり、そうしてはじめて我々の関心を得るものである。「ニーベルンゲンの歌」(写本 B 2233, 2234＝写本 C 2292, 2293) にはこういう描写がある。

Dô si den marcgrâven　sâhen tôten tragen,
ez enkunde ein schrîber　gebrieven noch gesagen
die manegen ungebære　von wîbe unde ouch von man,
diu sich von herzen jâmer　áldâ zéigén began.　(B 2233)

Der Étzélen jâmer　der wart alsô grôz,
als eines lewen stimme　der rîche künec erdôz
mit herzen leidem wuofe;　alsam tet ouch sîn wîp.
si klageten ungefuoge　des guoten Rüedegêres lîp.　(B 2234)

彼らはその辺境伯の遺骸が運ばれてきたのを見たとき、
男も女もこれを心から悼み悲しんだが、
その数々の愁嘆の有り様は、いかなる文人といえども
筆にも書けず、また口にも言えぬものがあったのである。

エッツェル王の悲嘆は甚だしく、この勢威ある国王が
心から打嘆くその号泣は、さながら獅子の吼えるのにも似て
響き渡った。王妃の悲嘆もこれに劣らなかった。
二人は健気なリュエデゲールの死のためにひどく嘆いたのである。

この「ニーベルンゲンの歌」の二詩節において語りがたいとされているもの、すなわち、「いかなる文人といえども筆にも書けず、また口にも言えぬもの」並びに「エッツェル王の悲嘆の有り様」を今や語ろうとしているものが、つまりその「哀歌」という作品なのである。しかし、その際「哀歌」は勿論のこと、その二詩節におけるリュエデゲール一個人の死に対する悲嘆を、ブルゴント族とフン族との恐ろしい戦いで倒れてしまったあらゆる英雄たちの死を嘆くという全体的な悲嘆へと拡大していっていると言うことができるのである。この両民族の死闘による大崩壊の

あと、殊に予期されもしなかったクリエムヒルトの衝撃的な死のあと、エッツェル王などわずかに生き残った者たちはその凄まじい最期を一体どのように感じ、その後一体どのように振る舞ったのであろうかということは、その叙事詩を読み終えてニーベルンゲンの災いの余韻がなおも強く残っている我々には大変興味があるところである。また「ニーベルンゲンの歌」との密接な関係を確認するためにも「哀歌」の全体的な内容を知っておく必要があるので、以下簡単にここでその「哀歌」の内容の概観を試みることにしよう。

「哀歌」の詩人はまず「ニーベルンゲンの歌」の叙述を短く繰り返すことでもって語り始めているのであるが、その際「ニーベルンゲンの歌」第一部はただ簡単に、しかし第二部の登場人物と出来事に関しては比較的詳細に叙述している。その描写は586詩行まで続くが、それは「哀歌」の詩人がニーベルンゲン悲劇の原因となった人物やその行動を強い調子でモラル的に判断を下しながら語り続ける――その内容については本稿の至るところで触れられるはずである――ということによって比較的詳しい叙述となっているのである。

587詩行目をもってようやく「哀歌」本来の主題に入っている。まず第一にフン族のエッツェル王がその悲劇についていかに凄まじく嘆き悲しんだことか、そしてその周囲の者たちもいかに節度を忘れて嘆いたことか、そのさまを執拗なまでに繰り返して描写したあと、663詩行からは、戦いで宮殿に倒れていた無数の死者を広範囲にわたって取り除く作業を始めたので、広間までの道は広くなり人々は進むことができたさまを述べている。しかし、広間の前にはクリエムヒルト (der scœnen Uoten kinde, V. 726) がヒルデブラント (Hildebrant, V. 733) に殺されてまだなおそのままになっていたので、彼女の家来 (ritter unde knehte, V. 754) もディエトリーヒ (Dietrîch, V. 759) も、そしてエッツェル王も再びこの誠実な女性 (getriuwer wîp, V. 834) の死を嘆き悲しんだのである。その上さらに彼女の息子オルトリエプ (Ortlieb, V. 863) 並びにエッツェル王の弟ブレーデリーン (Blœdelîn, V. 870) の死体もまたなお残っていたので、再び大きな嘆きの声が聞かれた。この悲劇の原因をボテルンクの息子 (der sun Botelunges, V. 886) エッツェル王は自分自身に押しつけている。すなわち、神の一撃 (der gotes slac, V. 954) がエッツェル王の上に襲いかかったのである。なぜなら、彼は5年間キリスト教徒だった (V. 986) のに、そのあと再び異教徒に戻った (vernogieren, V. 988) からである。上記3名の死者（クリエムヒルト、オルトリエプそしてブレーデリーン）は担架で連れ去られて棺に保管された (V. 1070-1073)。そして同じように主な死者イーリンク (Îrinc, V. 1081)、グルテル王 (Gunther, V. 1135)、ハゲネ (Hagene, V. 1285)、フォルケール (Volkêr, V. 1331)、ハゲネの弟ダンクワルト (Dancwart, V. 1415)、ウォルフプラント (Wolfprant, V. 1461)、ジゲスタップ (Sigestab, V. 1485)、ウォルフウィーン (Wolfwîn, V. 1521) そしてそのほかのベルンの英雄たち[7] も連れ去られた。800名或い

7) すなわち、ニートゲール (Nîtgêr, V. 1543)，ゲールバルト (Gêrbart, V. 1547)，ウィークナント (Wîcnant, V. 1555)，ジゲヘール (Sigehêr, V. 1561) そしてウィークハルト (Wîchart, V. 1563) の5名。このうちゲールバルトとウィークハルトは「ニーベルンゲンの歌」にも語られているが、ほかの3名は語られていない。

はそれ以上の死者（V. 1648）がもうすでに運び去られた。そこでウォルフハルト（Wolfhart, V. 1652）、ギーゼルヘル（Gîselher, V. 1786）及びゲールノート（Gêrnôt, V. 1851）、そしてついにリュエデゲール（Rüedegêr, V. 1959）もまた、そしてさらに1700名ものキリスト教徒並びに異教徒（V. 2178-2179）の死骸も見い出された。そこでヘルヒェ（Helche, V. 2191）王妃が育てた高貴な乙女たち――その中にはヘルヒェ王妃の姪ヘルラート（Herrât, V. 2201）もいた――もやって来て、しまいにはその国全体の住民も昼夜区別なく（V. 2251）殺到することとなり、人々はその親族の死骸を捜し歩き、見つけては運び去るのであった。そのため、かつて死者でいっぱいだった宮殿は次第に死骸がなくなっていった（V. 2279-2280）。ブルゴント国の３人の国王をはじめ高貴な者たちは棺に入れられ、次々に埋葬されたが、人々は主君たちが埋葬されるまで３日間休むこととてなかった（V. 2384-2385）。そのほか莫大な数の死者たちのためには大変広くてしかも大変深い特別な穴が堀られ、そこに埋葬された（V. 2398-2405）。今やあらゆる者が眠りの場所に埋葬されたとき、墓から帰って来た者たちから最も大きな悲しみが聞かれた（V. 2419-2424）。それはキリスト教徒にとっても異教徒にとっても残忍な別れのときであった（V. 2425-2426）。エッツェル王は非常に意気消沈していた（V. 2434-2435）ので、人々は王の気持ちを慰めようとしたが、無駄であった（V. 2479-2480）。そこでヒルデブラントとディエトリーヒが彼に、倒れ死んだ騎士たちの武具や武器を集めて、生き残った者たちのために保管しそれらを各々の国へ送るのが得策だと忠告したところ、エッツェル王はこの提案を喜んで受け入れた（V. 2561-2563）。そこで吟遊詩人スウェンメリーン（Swemmelîn, V. 2592）が使者となって12名の使者たち（V. 2595）とともに武器を運んでライン河畔のウォルムスへ悲しい知らせを持って行くこととなった。使者たちはウィーン（Wien, V. 2755）を越えてトレイゼンムーレ（Treisenmûre, V. 2795）を通りベッヒェラーレン（Bechelâren, V. 2799）へと進んで行った。そこではリュエデゲールの夫人ゲテリント（Götelint, V. 2808）とその娘が主人の帰りを待ち受けていたのであったが、ただただ血なまぐさい真実の報告を聞いて、両人は意識を失い倒れてしまったのであった（V. 3123-3129）。

スウェンメリーンはドーナウ河をさらに進んでパッサウ（Pazzouwe, V. 3294）へやって来た。そこでは有名な僧侶ピルグリム（Pilgrim, V. 3298）がその使者たちの知らせを聞いて狼狽した。ピルグリム僧侶はスウェンメリーンに帰りの際には是非とももう一度自分のところに立ち寄ってほしいと頼んだ（V. 3459-3462）。僧侶はすなわち悲劇の全貌を詳しく聞いて、それを書き留めさせたかったのである（V. 3463-3468）。

スウェンメリーンはバイエルンを通ってさらにシュワーベン（Swâben, V. 3494）を通ってライン河ほとりのウォルムス（V. 3529）へとやって来た。そこではグンテル王の妃プリュンヒルトがその訃報を聞いて口から血が流れ出るほど悲しく嘆いた（V. 3660-3665）。ローールゼ（Lôrse, V. 3683）の寺院のそばに家を建てて隠居生活をしていたウオテはその話が彼女の耳に入る（V. 3688-3689）と急いでウォルムスへ赴いた（V. 3699）が、その悲劇の話を聞いて苦しみのあまり７日後に死んで（V. 3958-3959）、ローールゼの僧院に埋葬された（V. 3986-3987）。献酌侍臣のジ

ンドルト (Sindolt, V. 3743)、ルーモルト (Rûmolt, V. 4017) 及びその国の人々は、プリュンヒルトの息子を騎士にして王冠を戴かせるべきだと言い張った。そこでウォルムスの宮廷は少し喜びに変わったのであった (V. 4098-4099)。スウェンメリーンはエッツェル王のもとへ帰って行った (V. 4100-4101)。

さて、エッツェル王の宮殿ではヒルデブラント、ディエトリーヒそしてヘルラートがその国を去ることとなった (V. 4114-4117)。これを知ったエッツェル王の悲しみはますます大きくなった (V. 4118-4121)。痛ましい別れ (V. 4183-4185) のあと、彼らはまずベッヒェラーレン (V. 4211) へ向かった。そこへ彼らが到着した (V. 4222-4224) とき、しかし、リュエデゲールの夫人ゲテリントは3日前に死んでいた (V. 4232-4233)。そこでディエトリーヒはゲテリントの娘ディエトリント (Dietlint, V. 4229) に、一緒に国を治めることのできる男性を世話してあげよう (V. 4274-4275) と約束して、自分の国へと帰って行った (V. 4278)。

ところで、パッサウのピルグリム僧侶 (V. 4295) はのちの人たちのためにその悲劇を初めから終わりまで彼の書記コンラート (Kuonrât, V. 4315) をしてラテン語で書き留めさせた。スウェンメリーンとそのほかの人たちが報告したと同じように書き留めさせたのである。その後その話はしばしばドイツ語でも語られた (V. 4316-4317) ので、みんなにはよく知られているのである (V. 4318-4319)。この歌がすなわち「哀歌」なのである (V. 4322)。

本来「哀歌」はここで終わっているのであるが、しかし次に明らかにのちに補足されたのであろうと考えられている38詩行の叙述が続いている。そこにはその後エッツェル王がどうなったのか、いくつかの可能性を挙げて語っているが、結局「エッツェル王はどのように最期を遂げたのか、そのことについてはなおも今誰も知らない」(V. 4358-4360) という言葉で締めくくられている。

要するに、「哀歌」は「ニーベルンゲンの歌」における悲劇の原因とその無残な結果についてモラル的に判断を下しながら語ったあと、死骸の処理とその埋葬、そのたびに起こる大きな悲嘆、そしてそのあと武器の保管並びに使者の派遣について語ったものであり、特にエッツェル王、ヒルデブラントそしてディエトリーヒの3人に死者の生前の活躍ぶりを語らせることによって、ブルゴント族とフン族との戦いで倒れた英雄たちに寄せるいわば一種の「鎮魂歌」ともなっている作品なのである。

2. 「ニーベルンゲンの歌」と「哀歌」

以上「哀歌」の内容を紹介したことから明確に言えることは、「哀歌」の詩人は確かに「ニーベルンゲンの歌」――それが写本Bであったのか、或いは写本Cであったのか、それとも両写本であったのかはのちの課題として残しておくにしても――をよく知っていたということである。「哀歌」で述べられていることは「ニーベルンゲンの歌」の描写に大変よく似ているばかりではなく、多くの箇所で同一でさえあるのである。「哀歌」の詩人はその叙述のために繰り返し出典をほのめ

かす手法を用いているが、その出典が、はっきりとではないにしても暗に「ニーベルンゲンの歌」をさし示していることは容易に考えられることである。「哀歌」の最初の部分にはこう語られている。

Ditze alte mære	この古い話は
bat ein tihtære	ある詩人が
an ein buoch schrîben.	一冊の本に書いた。
des enkundez niht belîben,	そのため
ez ensî ouch noch dâ von bekant,	ブルゴント国の人々が
wie die von Burgonden lant	その当時栄誉をもって
bî ir zîten und bî ir tagen	いかに暮らしていたかが
mit êren heten sich betragen.	今日でもなお知られている。

(V. 17–24)

そしてこのあとエッツェル王の勢威について語っているところでは

der rede meister hiez daz	話の大家は、その国王が
tihten an dem mære,	いかに裕福であったか、
wie rîch der künec wære.	その話を詩作した。
diu rede ist gnuoc wizzenlîch.	その話はよく知られているものである。
er het aller tägelîch	国王は常に12人の国王を
zwelf künige under im.[8]	自分の配下に従えていた。
von der wârheit ich daz nim.	それは本当のことである。

(V. 44–50)

そしてそのあと再度「ニーベルンゲンの歌」を暗示しながら

Iu ist daz dicke wol gesagt	諸君にしばしば語られている
wie Etzel hête bejagt	ところによると、エッツェル王は
fürsten lobelîche	大饗宴のために
heim in sîniu rîche	誉れ高き国王たちを
durch eine grôze wirtschaft.	自分の国に招待したということだ。

(V. 159–163)

というふうに語られている。これらは確かに中世ドイツ文学でよく好んで用いられる、原典を引き合いに出す一つの手法であり、形式的なものではあるけれども、しかしその背景には「ニーベルンゲンの歌」の知識が基盤になっているということは両者の内容が一致することからも明らかである。

8) 「ニーベルンゲンの歌」(B 1391, 3＝C 1418, 3): unt daz si (Kriemhild bei Etzel) alle zîte zwelf künige vor ir sach. (クリエムヒルトはいつも12人の王にかしずかれていた) 及び B 1235, 2＝C 1259, 2 をも参照のこと。なお、12人の王というのはエッツェル王の宮廷に亡命して来ている他国の王たちのことであろう。

しかし、そのあとクリエムヒルトの復讐という行為について語っているところの叙述はそのことに関して疑問をもたらすのである。

Des buoches meister sprach daz ê:	本の大家はかつてこう言った。
dem getriuwen tuot untriuwe wê.	不誠実が誠実なものを悲しめる。
sît si durch triuwe tôt gelac,	彼女は誠実のために死んだのであるから、
in gotes hulden manegen tac	神の恩恵の中で多くの日々を
sol si ze himele noch geleben.	天国でなおも生きることができるのである、と。
(V. 569–573)	

ここで引用した詩をそのままの形で「ニーベルンゲンの歌」の中に見い出そうとしても無駄なことである。この点で「哀歌」の詩人が「ニーベルンゲンの歌」を知っていてそれを手本に用いたということに関して疑問が生じてくるわけである。

この点に関してフリードリヒ・パンツァー[9]は「中世での引用は現代の基準で測られてはならない」と述べている。すなわち、彼によれば、引用の内容がその引用された箇所の内容と一致しているとき、中世における引用の本質はもうすでに満たされているのであり、従って、同一性と類似性との間の相違は当時の中世においては言語的にも概念的にもまだ知られてはなく、両者は „gelîch“ という一つの語で表わされていたということも考えられるのである。その例として F. パンツァーが挙げているのであるが、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハはその「パルチヴァール」において、ヴァルター・フォン・デァ・フォーゲルヴァイデ——彼はチューリンゲンの方伯の宮廷でのあまりにも乱雑な社会を批判している——の有名な格言 „Der in den ôren siech von ungeschihte sî,“ (不運にも耳を煩っている者は)[10] を „guoten tac, bœs unde guot.“ (今日は、悪しき方々に善き方々よ)[11] という言葉で引用したのである。このヴォルフラムの言葉はヴァルターの格言には現われていない。しかし、それはその内容の才気溢れた完全に正確な表出を与えている。「哀歌」と「ニーベルンゲンの歌」の場合にもそのようなことが考えられると F. パンツァーは言うのである。事実、上に挙げた「哀歌」の本文はなるほど「ニーベルンゲンの歌」には見い出されえないが、しかし恐らくは「ニーベルンゲンの歌」の知識を基にして陳述された考えなのである。なぜなら、ジーフリト殺害は不誠実な者の仕業であったということは「ニーベルンゲンの歌」では一度ならず十分に強調されて語られているし、クリエムヒルト自身

9) Friedrich Panzer: Das Nibelungenlied — Entstehung und Gestalt, Verlag W. Kohlhammer, Stuttgart 1955. S. 84–85.

10) この詩を資料 I として巻末に載せてあるので参照のこと。なお、この詩は次のテクストによったものである。Franz Pfeiffer: Walther von der Vogelweide, F. A. Brockhaus, Leipzig 1864. S. 202.

11) この部分を資料 II として巻末に載せてあるので参照のこと。なお、この部分は次のテクストによったものである。Deutsche National-Litteratur 5. Band 2. Abteilung (Wolfram von Eschenbach: Parzival, 2. Teil 1. Abteilung, bearbeitet von Prof. Dr. Paul Piper, Sansyusya Publishing Co., Ltd. Tokyo 1973.) S. 297. また、邦語訳するにあたって加倉井粛之・伊東泰治・馬場勝弥・小栗友一の四氏による共訳（郁文堂）を参照させて頂いたことを付記しておきたい。

もまた彼女とジーフリトとの関係において「誠実」の原型であったということを「ニーベルンゲンの歌」は最初から最後まではっきりと述べようと努めているからである。従って、「哀歌」の詩人がその手本に用いたものは確かに「ニーベルンゲンの歌」の何ものでもなかったわけである。

またそのほかの副次的な点でも「哀歌」の表現は「ニーベルンゲンの歌」のそれと異なっていることが多いのであるが、しかしそれも「哀歌」の詩人が「ニーベルンゲンの歌」を知らなかったという理由にはならない。例えば、「ニーベルンゲンの歌」(B 2219, 3＝C 2277, 3) ではゲールノートがリュエデゲールによって打ち殺されるとき「石のごとく固い兜を貫いて」(durch hélm vlínshérten) とあるのに、「哀歌」(V. 1854–1855) では「胸を」(gein den brusten unden) 突き刺されたことになっている。また「ニーベルンゲンの歌」(B 1343, 1＝C 1370, 1) ではフラーヒェン国の公爵の名が「ラームンク」(Der herzoge Râmunc ûzer Walachen lant)[12] となっているのに、「哀歌」(V. 347) では「ジゲヘル」(Sigeher von Walâchen) という名になっている。さらにベルンのジゲスタップ公 (Der herzoge ûz Berne Sigestap, B 2258, 1＝C 2317, 1) は「ニーベルンゲンの歌」(B 2283, 3＝C 2342, 3) では「ディエトリーヒの甥」(Dietrîches swester sun) となっているのに、「哀歌」(V. 1484–1495) によると「ディエトリーヒの従弟」ということになっている。しかし、これらの小さな相違は何も意味してはいないのではあるまいか。なぜなら、そのような不注意はよくあるもので、例えば、イーリンクは「哀歌」402詩行と419詩行の二箇所では「ロートリンゲン出身」(von Lutringe) となっているのに、そのあとの1102詩行では「ニーベルンゲンの歌」(B 2028, 1＝C 2084, 1: von Tenemarke der marcgrâve Îrinc) と同じように「デンマークの勇士」(des vil küenen Tenen lîp) ということになったりしていることもあるからである。もう一つ例を挙げると、「哀歌」3900 詩行以下では、第一にグンテル王がディエトリーヒによって取り押えられ、そのあとハゲネが同じくディエトリーヒによって取り押えられることになっているが、「ニーベルンゲンの歌」ではその逆、すなわち、まず第一にハゲネが、次にグンテル王が捕えられることになっているのである。しかし、「哀歌」のそのような手違いはすぐあとの詩行で同じように無頓着に

Hagen und ouh *Gunthêr*	ハゲネとグルテン王は
mohten dô niht strîten mêr:	これ以上戦うことができなかった。
dô twanc si Dietrich beide.	その二人をディエトリーヒが取り押えた。
(V. 3931–3933)	

というように正しい順序に訂正されているのである。同じように、「哀歌」の詩人はブルゴント族のことを確かに「ニーベルンゲンの歌」と完全に一致させて規則的に „Burgonden“ (V. 22, 188 など)[13] 乃至は „Burgondære“ (V. 3300) と呼んでいるのに、しかし一度だけ「堂々たるライン・フランク族」(den stolzen Rînfranken, V. 303) とも呼んでいるわけであるが、これも無頓

12) Walachen (B)＝Vlâchen (C)

13) そのほかに288, 440, 463, 486, 734, 1310, 1414, 1786, 1840, 1894, 2586詩行で使われている。

着な表現であって、詩人にとってはそれほど重要なものではなかったのである。すなわち、或る手本をそのまま正確に再描写しなければならないという義務は中世においても全く知られていなかったということが考えられるからである。実際、「哀歌」がその手本にある主要な出来事全てを述べ、そのほかの副次的なものもその手本と完全に一致していなければならないと要求するのは誠に不合理というものではあるまいか。

否、それどころか「哀歌」の詩人はさらに「ニーベルンゲンの歌」には見られない多くのものをも語っているのであるが、それも至極当然のことである。それに当てはまるものとしては主に人物などの名前を挙げることができる。例えば、リュエデゲールの娘は「ニーベルンゲンの歌」では名前が呼ばれないままになっているのであるが、一方「哀歌」では「ディエトリント」(Dietlint, V. 4229) と呼ばれているのである。同じように、「ニーベルンゲンの歌」には語られていないリュエデゲールの馬の名も「哀歌」では「ボイムント」(Boymunt, V. 2855) と呼ばれている。そしてまた「ニーベルンゲンの歌」で語られているエッツェル王の宮殿での凄まじい戦闘を「哀歌」の詩人はその上にポーランドのヘルマン (Der herzoge Herman, ein fürste ûzer Pœlân, V. 345-346) とトルコのワルベル (ûz Türkîe, Walber der edelvrîe, V. 355-356) という新しい人物を登場させることによって増大させている。さらにディエトリーヒの家来たちに関しても「哀歌」の詩人はニートゲール (Nîtgêr, V. 1543)、ウィークナント (Wîcnant, V. 1555) そしてジゲヘール (Sigehêr, V. 1561) というような「ニーベルンゲンの歌」には語られていない名前を新しく付け加えている。同じように、ヘルヒェ王妃が育てた高貴な乙女たち——但し、ヘルラートだけは「ニーベルンゲンの歌」にも名が挙げられている——の上にも一連の新しい名前が付け加えられている。すなわち、ニートゲール王の娘ジゲリント (Sigelint, V. 2206)、フランス (Vrancrîche) のリウデゲール (Liudegêr) 王の娘ゴルトルーン (Goldrûn, V. 2208)、ノルマンディー (Normandî) の或る国王の娘ヒルデブルク (Hildeburc, V. 2217)、ギリシア (Krieche) の或る国王の娘ヘルリント (Herlint, V. 2215) そしてジントラム (Sintram) 王の娘アデリント (Adelint, V. 2223) という名前がそれである。そしてさらにオーストリア (Ôsterrîche) の女王として乙女のイザルデ (Isalde, V. 2759) をウィーンに配属させているのであるが、これも「哀歌」の詩人が新しく付け加えたものである。

しかし、そういった人物の名前においてばかりではなく、あらすじにおいても「ニーベルンゲンの歌」には語られていない若干の小さな特徴を指摘することができる。例えば、ヒルデブラントはフォルケールに打ち殺されずに済んだのであったが、それはヘルプフリヒ (Helpfrich, V. 1347) の手助けがあってのみであること、そしてブルゴント国の若きギーゼルヘルはディエトリーヒの家来ウォルフウィーン (V. 1521)、ニートゲール (V. 1543) 及びゲールバルト (Gêrbart, V. 1547) を、グンテル王は同じくディエトリーヒの家来ウィークナント (V. 1555)、ジゲヘール (V. 1561) 及びウィークハルト (V. 1563) をそれぞれ殺したこと、そしてまた同じくディエトリーヒの家来ウォルフプラント (V. 1461) はダンクワルトによって打ち殺されたこと、そしてグ

ンテル王はベルンのディエトリーヒに捕えられる前に彼を三度も打ちのめした（V. 1195）こと、さらにウォルフウィーンがヒルデブラントの甥（V. 1529）であること、そしてさらにイルンフリト（Irnfrit, V. 395）がテューリンゲン（Dürengen）を、ハーワルト（Hâwart, V. 399）がデンマークを、イーリンク（V. 401）がロートリンゲンを去ってエッツェル王のところへやって来ていたということ、これら全ての記載は「ニーベルンゲンの歌」においては見い出されえないものなのである。このように「哀歌」の詩人は「ニーベルンゲンの歌」に欠けているものも多く語っているのであるが、しかしその背景には明らかに「ニーベルンゲンの歌」の知識が基盤となっていたということは、以上述べてきたことからも明確に確認できることなのである。

3. 「ニーベルンゲルの歌」写本Cと「哀歌」との間の依存関係

それでは一体、「哀歌」は「ニーベルンゲンの歌」のどの写本、具体的に言えば、写本Bと写本Cのうちどちらを手本に用いたのであろうか。この問題に関して参考になることは、まず「哀歌」3682-3687 詩行及び 3986-3987 詩行の二箇所にはロールゼ（Lôrse）という地名が出てくることである。すなわち、

Uote diu vrouwe hêre	高貴な婦人ウオテは
ze Lôrse in ir hûse was,	ロールゼの彼女の家の中にいた。
dâ si venjete unde las	彼女は、自分が最初に建てた
an ir salter alle ir tagezît,	広い修道院の中で
in einem münster, daz was wît,	一日中祈りながら
des si von êrste dâ began.	聖書の詩篇を読んでいた。
(V. 3682-3687)	
diu edel Uote wart begraben	高貴なウオテは
ze Lôrse bî ir aptei. (V. 3986-3987)	ロールゼの僧院に埋葬された。

このクリエムヒルトの母ウオテがウォルムスからロールゼに移ってそこに住んでいて最後にはそこに埋葬されたという描写は、「ニーベルンゲンの歌」写本Bには見られないのであるが、写本Cには次のように語られている。

Eine rîche fürsten aptey stifte vrou Uote
nâch Dancrâtes tôde von ir guote,
mit starken rîchen urborn, als ez noch hiute hât,
daz klôster dâ ze Lôrse, des dinc vil hôhe an êren stat. (C 1158)

ウオテ婦人は、ダンクラートの死後、
彼女の領地より今もなお入る夥しい収益でもって
王者にふさわしい一つの僧院を建てた。
それはロールゼの地にあって、大変名誉ある僧院である。

Dâ was der frowen Uoten ein sedelholf bereit

ze Lôrse bî ir klôster　mit grôzer rîcheit:
dar zôch sich diu witewe　von ir kinden sît,
dâ noch diu frowe hêre　begrabn in eime sarke lît.　(C 1161)

そこでウオテ婦人はロールゼの僧院のそばに
非常にすばらしい一つの館を建てた。
そこへのちに彼女は自分の子らと離れて暮らすこととなったのである。
そこには今もなおその高貴な婦人が一つの棺の中に埋葬されている。

すなわち、この二詩節は写本Cの詩人が写本Bを改作する際あとから付け加えた補足詩節(Zusatzstrophe)[14]であり、写本Bには見つけ出されえないものである。従って、このロールゼに関する叙述の点で、「哀歌」は写本Cと何らかの関係があったことは確かなのである。

またこの両者を結びつけるものとして挙げられるのは、エッツェル王の背教に関する叙述である。まず「哀歌」ではこう語られている。

«mîniu apgot scuofen daz ich louc
siner starken gotheit,
daz ich lie die kristenheit.
daz ist âne zwîfel wâr:
ich was kristen wol fünf jâr;
doch gescuofen si daz sider
daz ich mich vernogierte wider,
und wart in als ê undertân.» (V. 982–989)

「私の偶像の所為で、私は
神聖なキリスト教を欺くこととなり、
私はキリスト教を去ってしまった。
私が5年間キリスト教徒であったことは
疑いもなく本当のことである。
しかし、そののち私の偶像が私をして
再び異教徒にせしめ、以前と同じように
私はそれらに従うこととなったのだ。」

エッツェル王が5年間キリスト教徒だったのち、再び異教徒に戻ったというこの記載は、「ニーベルンゲンの歌」写本Bには見い出されえないのであるが、しかし写本Cにはこうあるのである。

«Ern ist niht gar ein heiden,　des sult ir sicher sîn:
jâ was vil wol bekêret　der liebe herre mîn,
wan daz er sich widere　vernôgieret hât.»　(C 1284, 1–3)

「彼は全くの異教徒ではないことをあなたはご承知下さい。
事実、私の主君（エッツェル王）は改宗していたのですが、
彼は再び異教徒となったのです。」

すなわち、リュエデゲールがクリエムヒルトにエッツェル王と結婚するようにと勧めているこの詩節は、写本Bにはない写本Cの詩人の補足詩節なのである。

また本文の内容だけではなく韻律に至るまで「ニーベルンゲンの歌」写本Cと「哀歌」とは相互に影響し合っていることが明らかである。例えば、写本B 2086詩節のあとに写本Cでは次の補足詩節が付け加えられている。

14)　実際この部分にはロールゼに関する8詩節の補足詩節（C 1158–1165）が続いているのであるが、ここでは特に関係のある2詩節だけを挙げることにした。

Sine hêt der grôzen slahte *alsô niht gedâht*:
si hêt ez ir ahte *vil gerne dar zuo brâht,*
daz niwan Hagene aleine den lîp dâ hête lân. (C 2143, 1-3)

彼女はそのように大きな戦いを考えもしなかった。
彼女はただ彼女の計画では
ハゲネ一人の命を奪い取りたかっただけなのである。

一方「哀歌」では次のように語られている。

Diu enhetes *niht alsô gedâht.*	彼女はそのようなことは
si het iz gerne dar zuo brâht,	考えもしなかった。彼女は、
dô siz prüeven began,	それを計画したとき、
daz niwan der eine man	ただ一人の男の命を
den lîp hête verlorn. (V. 259-263)	奪い取りたかっただけなのである。

この両者は内容から表現方法及び韻律に至るまで全くと言ってよいほど似かよっているのである。

しかし、「哀歌」と「ニーベルンゲンの歌」写本 C との間には内的・外的な影響関係があると認められても、それだからと言って、「哀歌」の詩人が写本 C を手本に用いたということにはならない。なぜなら、その逆、すなわち、写本 C の詩人が「哀歌」を参照したということも考えられるからである。否、それどころか、写本 C は写本 B と「哀歌」との間の矛盾を取り除く努力から生じたものであるとも言われてきているくらいなのである。[15]

それでは一体、写本 B→「哀歌」→写本 C 或いは写本 B→写本 C→「哀歌」のうちどちらが正しい順序なのであろうか。[16]

しかし、この依存関係に関する問題は残念ながら未解決のままにしておかざるをえない。目下のところ、この相反する可能性のどちらも決定的には確証されえないものだからである。或る作品が他の作品に依存しているという問題に決定を下すことが、いかにむずかしいことか、そのこ

15) 例えば、フリードリヒ・ヴィルヘルム (Friedrich Wilhelm: Über die Fassungen B und C des Nibelungenliedes und der Klage, ihre Verfasser und Abfassungszeit, Georg D. W. Callway in München 1916, S. 18 u. 23-24.) の見解を参照のこと。

16) しかし、この場合「哀歌」も「ニーベルンゲンの歌」と同じように写本 B と写本 C (改作) とがあるから問題は複雑である。ヴェルナー・シュレーダー (Werner Schröder: Das Leid in der Klage, ZfdA. 1951, S. 54.) は、W. ブラウネ (Wilhelm Braune: Die Handschriftenverhältnisse des Nibelungenliedes, 1900.) と Fr. フォークト (Friedrich Vogt: Zur Geschichte der Nibelungenklage, 1913.) の研究以来「ニーベルンゲンの歌」写本 B→「哀歌」写本 B→「ニーベルンゲンの歌」写本 C+「哀歌」写本 C という年代順が確定していると述べているが、しかしこの確証も決定的なものではない。ヴェルナー・ホフマン (Werner Hoffmann: Die Fassung C des Nibelungenliedes und die Klage, 1967, S. 139.) は、とにかくこの問題に関しては、「哀歌」写本 B→「ニーベルンゲンの歌」写本 C という前提からは出発しない新しい研究が必要であると提起している。要するに、ここで疑いのないものと言えるのは、ヴェルナー・ホフマンも述べているように、この年代的順序の最初と最後だけであろう。この 4 つの作品の相対的年代順決定の問題は、私のこれからの課題として残しておくことにし、とりあえず本稿では「哀歌」の改作 (写本 C) は度外視して考察を進めてゆきたい。

とは例えば「ルーモルトの忠告」(Rûmoldes rât) でもわかることである。

まず「哀歌」においてルーモルトはこのように意見を述べている。

«hete mîn herre getân	「私の主君がこの国を出発するとき、
als ich im mit triuwen riet,	私が彼に心をこめて忠告していたように
do er von disem lande schiet,	彼がもししていれば、
sone wære er niht erstorben.» (V. 4060-4063)	彼は命を失うことはなかったであろう。」

ここで特に重要なのはイタリック体の4061詩行である。この詩行を「ニーベルンゲンの歌」両写本における「ルーモルトの忠告」と比較するならば、「哀歌」と「ニーベルンゲンの歌」写本 C との関係が明白になってくる。まず „rât“ と „râten“ をルーモルトは「ニーベルンゲンの歌」両写本で使用しており、同じように „triuwe“ という語を用いて話している。すなわち、「ニーベルンゲンの歌」写本 B では、

«Welt ir niht volgen Hagene,　iu rætet Rûmolt,
wand ich iu bin *mit triuwen*　vil dienestlîchen holt,
daz ir sult hie belîben　durch den willen mîn,
unde lât den künec Etzel　dort bî Kriemhilde sîn.»　(B 1466)

「もしハゲネ殿の言葉に従わないならば、
真心をもって忠実にお仕え致すこのルーモルトが進言致します。
私の言うことをお聞きになって、当地にお留まり下さい。
クリエムヒルト様のことはエッツェル王にお任せなさいまし。」

«Des rât' ich iu belîben.　rîch sint iuwer lant.
man mac iu baz erlœsen　hie héimé diu pfant
danne dâ zen Hiunen.　wer wéiz, wie iz dấ gestât?
ir sult belîben, herren:　*daz ist der Rûmoldes rât.*»　(B 1469)

「それゆえ、お留まりになるようお勧め致します。お国は豊かであり、
フン族の国よりもここの方が万一の危険から守られます。
向うの様子など、誰にもわかりはしません。
王様、お留まりなさいまし。これがルーモルトの意見です。」

一方、写本 C ではこう語られている。

«Unt welt ir im niht volgen,　iu rætet Rûmolt
— ich bin iu *mit triuwen*　vil dienestlîchen holt —
daz ir hie belîbet　durch den willen mîn,
unt lât den künec Ezele　dort bî Kriemhilde sîn.»　(C 1494)

«Des rât ich iu belîben:　rîch sint iwer lant.
man mag iu michel sanfter　lœsen hie diu pfant
danne dâ zen Hiunen:　ine weiz wiez dâ gestât.
ir sult belîben, herre;　*daz ist mit triwen mîn rât.*»　(C 1499)

写本Cにおけるこの二詩節は邦語訳すると写本Bのそれとほとんど同じ意味になるのであるが、しかし写本Cでは „triuwe“ という言葉がもう一度用いられ、しかもその際 „rât“ という言葉と結びついて使われていることは注目すべきである。この写本Cの *„daz ist mit triwen min rât.“* という表現は「哀歌」における *„als ich im mit triuwen riet“* (V. 4061) という表現と相互に影響関係があると見てよいのではあるまいか。なぜなら、さらに注目に値することであるが、「哀歌」の次の詩行に見られる „scheiden“ (V. 4062) という動詞は「ニーベルンゲンの歌」写本Bよりむしろ写本Cとより深く関係があるように思われるからである。すなわち、グルテン王がルーモルトにその不在期間だけ国を司るよう任せる場面では、写本B 1519＝写本C 1552 詩節に直接引き続いて写本Cでは „scheiden“ という動詞を含んだ次の補足詩節がさし込まれているのである。

E daz si *schieden* dannen,　der künec ze râte gie
mit sînen hœhsten mannen:　unberihtet er niht lie
lant unde bürge;　die der solden pflegen,
den liez er ze huote　vil manegen ûzerwelten degen.　(C 1553)

彼らがそこから出発する前に、国王は主な家臣たちと
相談をした。国や数々の城を彼はそのままにして
おきはしなかった。城を護るべき人々には
国王は護衛として多くのすぐれた勇士を残して置いたのである。

しかし、この „scheiden“ という動詞は両写本のそのあとの詩節（B 1520＝C 1554）にも再度用いられているので、この „scheiden“ という動詞に決定的な確証を得るのは非常にむずかしいところである。しかし、それにもかかわらず、ここでは少なくとも一つの視点――「ニーベルンゲンの歌」写本Cと「哀歌」との間には相互の影響関係が現存しうるという一つの視点がほのめかされうるのである。しかし、それだからと言って両者の依存関係、すなわち、「哀歌」が写本Cの手本となったのか、それとも写本Cが「哀歌」の手本となったのかは容易に決定することができないのである。

また、その三つの作品の相対的年代順決定の問題だけではなく、「ニーベルンゲンの歌」両写本及び「哀歌」の成立年代決定の問題に関しても異論のあるところである。フリードリヒ・パンツァー[17]とヴェルナー・シュレーダー[18]が、「ニーベルンゲンの歌」両写本と「哀歌」の成立を

17) Friedrich Panzer: Das Nibelungenlied — Entstehung und Gestalt, W. Kohlhammer Stuttgart 1955. S. 98. を参照のこと。すなわち、彼によれば、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの「パルチヴァール」第8巻における「ルーモルトの忠告」引用（420, 25-421, 10）は「ニーベルンゲンの歌」写本Cに由来するものと推定し、従って「パルチヴァール」第8巻が遅くとも1206-1207年に成立したときには、写本Cはもうすでに成立していたというものである。

18) Werner Schröder: Das Leid in der Klage, Zfd A. 1951. S. 56-57. を参照のこと。彼もF. パンツァーと同じように、ヴォルフラムの「パルチヴァール」第8巻における「ルーモルトの忠告」は「ニーベルンゲンの歌」写本Cの知識を前提としているばかりではなく、「哀歌」の知識をも前提としていると考えるのである。

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの「パルチヴァール」第8巻成立（遅くとも1206-1207年）以前だと推定している一方、フリードリヒ・ヴィルヘルム[19]は、「ニーベルンゲンの歌」写本Bの成立を1190-1200年、「哀歌」並びに「ニーベルンゲンの歌」写本Cの成立を1214年以後、しかも「ニーベルンゲンの歌」写本Cは写本Bと「哀歌」との間の矛盾を取り除くため1226-1228年（或いはもっとのち）に詩作されたものだと推定している。さらにもう一つ別の見解としてベルナー・ホフマン[20]は、将来詳しい研究によって「ニーベルンゲンの歌」写本Bは1200年に生じ、およそ10年遅れて「ニーベルンゲンの歌」写本Cが成立し、それから1220年に「哀歌」が成立したという結論――すなわち、それぞれの作品が年代的に十分な間隔をもって成立したという結論に達しなければならないと述べている。要するに、ここではっきりと言えることは、ただ「ニーベルンゲンの歌」両写本と「哀歌」の詩人たちはとにかく同時代の人々であり、恐らくはお互いに影響を及ぼし合ったであろうということだけであり、それぞれの成立年代並びに依存関係については正確なことは何も決定されえないのである。このように、これらの問題はさしあたり決定的に結論が下されるものでもなく、また今の我々にとってはその解決もそれほどさし迫ったものでもないので、のちの課題としてここでは問題提起だけにとどめておきたい。むしろここで我々にとってもっと大切なのは、「ニーベルンゲンの歌」写本Cの詩人及び「哀歌」の詩人がそれらの作品を作り上げたとき、彼らはなぜ改作乃至詩作したのか、言い換えれば、それらの作品は写本Bに対してどのような特質を有しているのか、そのことを明らかに示すことである。以下、それぞれの作品を比較検討することによって、写本C及び「哀歌」の特徴を対照的に明示すると同時に写本Bのもつ特異性をいま一度確認することにしたい。

4. 「ニーベルンゲンの歌」写本Cの特徴

「ニーベルンゲンの歌」写本Cは写本Bの改作であるということは上でも何度か触れた。しかもそれは念入りに企てられた一つの改作であるとも言えるのである。一体どのような改作が施されたのであろうか。

---

19) Friedrich Wilhelm: Über die Fassungen B und C des Nibelungenliedes und der Klage, ihre Verfasser und Abfassungszeit, Georg D. W. Callway in München 1916. すなわち、彼の見解を要約すると次のようになる。まず「ニーベルンゲンの歌」写本Bはパッサウのヴォルフゲル僧侶（Wolfger, 1191-1204）の依頼でオーストリアの詩人によって詩作された。「哀歌」は、バイエルン公爵ルートヴィヒ（Ludwig der Kelheimer）――ロールゼ（Lôrse）の修道院と密接な関係があった――がフリードリヒ2世（1212-1250）より領地としてラインプファルツを授けられた1214年以後にようやくバイエルンの詩人によって詩作された。この「哀歌」と「ニーベルンゲンの歌」写本Bとの間の矛盾を取り除くため、「ニーベルンゲンの歌」写本Cが、恐らく1226年から1228年までに（或いはもっとのちであるかも知れないが）、バイエルンの詩人によってヴィッテルスバッハ（Wittelsbach）家のために詩作された。恐らく「哀歌」の詩人と「ニーベルンゲンの歌」写本Bの詩人は同一人物であったろうというのがFr. ヴィルヘルムの結論なのである。

20) Werner Hoffmann: Die Fassung C des Nibelungenliedes und die Klage, In: Festschrift Gottfried Weber, hrsg. von Heinz Otto Burger und Klaus von See, Bad Homburg 1967. S. 142. を参照のこと。

まず写本 C には至るところに新しい詩節が補足されているのであるが、この補足詩節はテクストの内容を滑らかに修正するという役目を果している。例えば、写本 B 505（＝C 516）詩節には、プリュンヒルトの国へ行くのに3000名の兵が集まったと語られているが、そのあとに写本 C では2詩節が補われて、「さて、愚かな人なら、それは嘘に違いないと疑うであろう。すなわち、そんなに多くの騎士が同じところでどのようにしておられるのか、と。…しかし、ジーフリトは、ご存知のように、王国とニーベルンゲンの宝を持っていたので、騎士たちに十分与えても一向に乏しくはならなかったのである」(C 518-519) と語られることによって、読者が不審に思うこともありうる小さな欠陥をふさぐ役目を果しているのである。同じように写本 B 1573 (C 1608) 詩節に見られる1万人の騎士をハゲネがドーナウ河で対岸へ運ぶという描写も、写本 C ではその次に「その船は長いうえに丈夫で幅広く大きかったので、一度に400名の勇士を運ぶことができた」(C 1609) と補足詩節で語られることによって、読者に語られた内容の信頼度を深めているとも言えるのである。ブルゴント族とフン族との戦いでエッツェル王の妃クリエムヒルトが宮殿に火を放たせた場面 (B 2111＝C 2168) もまた然りで、その火事からブルゴント族たちが逃れることができたのも、そのあとの補足詩節が語っているように、「その広間が丸天井造りであった」(C 2178, 1) からである。

従って、ここで言えることは、写本 C は現実的な描写の傾向があるということである。このことはまた、写本 B においてはしばしば騎士の数などが幻想的に多くなっているのに、写本 C ではその数を可能な数字にまで減らしているという事実によっても裏書きされることである。例えば、グンテル王がプリュンヒルトを求めての求婚旅行に出かける際、写本 B 339 詩節では「3万人の騎士」を調達させるよう申し出るのであるが、写本 C 347 詩節では「2000人の騎士」に改められているし、また写本 B 1117 詩節ではニーベルンゲンの宝が「8000 人の軍兵」によって運ばれたということになっているのに、一方写本 C 1130 詩節では「1200人」によって運ばれたというふうに改作されているのである。

このように改作者 C が事実に即しているということは、彼はまたあらゆる神秘的なものを好まないということにおいても明らかである。すなわち、写本 B の詩人が語るニーベルンゲン族とは「強い巨人」(starke risen, B 94, 2) であるのだが、写本 C の詩人が語るニーベルンゲン族とは「巨人のように強い」(starc als risen, C 95, 2) ものなのである。そしてまた写本 B 100 詩節でわかることは、竜の血を全身に浴びたジーフリトは「その肌が不死身の甲羅となった」(sîn hût wart hurnîn) のであるが、一方写本 C 100 詩節によると「そのすぐれた英雄は、どんな武器も傷つけることができないような固い皮膚となった」(des ist der helt gemeit von alsô fester hiute, daz in nie wâfen sît versneit.) のである。

従って、以上のことから言えるのは、写本 C の詩人はメールヒェン的な要素を取り除いているということであり、ジーフリトはもはや古代ゲルマンの不死身の英雄なのではなく、中世騎士社会における英雄なのである。そしてまた改作者 C は宮廷的儀礼によく通じた人であり、宮廷

的形式を守ることに価値を置いているということも明らかである。そのことをよく表わしているのが、殊に地位の高い人乃至は話し手の相手の人をまず先に挙げることによってテクストをより宮廷化させる改作である。例えば、写本Bでジーフリトはグンテル王にこう言っている。

«der geséllen bin ich einer,　daz ander soltu wesen.»　(B 342, 1)

「一行は、私がまずその一人、そしてあなたが二人目。」

これに対して写本Cでは

«der gesellen sît ir einer,　der ander sol ich wesn.»　(C 350, 1)

「一行は、あなたがまずその一人、そして私が二人目。」

と改作されている。さらにこの作品の最後、すなわち大崩壊のあとでも、改作者Cは宮廷的儀礼を守ることを怠ってはいない。すなわち、改作者Cは、写本Bの

Dietrîch und *Etzel*　weinen dô began.　(B 2377, 3)

そこでディトリーヒとエッツェルは泣き悲しんだ。

という順序を

Ezel unde *Dietrîch*　weinen dô began.　(C 2437, 3)

というふうに礼儀正しい順序に改作しているのである。

そしてまた改作者Cは明晰なものと合理的なものを好む詩人であり、また些細なことにまで正確さを要求する詩人だということも明らかである。例えば、写本B 1924詩節でダンクワルトは「ジーフリト殿が亡くなられたのは、私がまだ子供の折のことです」(ich was ein wênic kindel, dô Sîfrit vlôs den lîp.) と語っているが、しかし、ダンクワルトはプリュンヒントを求めての求婚旅行の随行者であったことを考えれば、この彼の言葉は矛盾することになる。そこで写本Cの詩人は1976詩節で「ジーフリト殿が亡くなられたのは、私がまだ小さな従者の折のことです」(ich was ein vil kleiner kneht, dô Sîvrit vlôs den lîp.) というふうにダンクワルトに語らせることによって少なくともその矛盾をやわらげているのである。そしてまた写本B 911詩節でグンテル王が「ワスケンの森へ」(hin zem Waskenwald) 狩りをしに行こうと提案するが、そのあとの918詩節で「彼らはライン河を越えてゆくのである」(si wolden über Rîn) と語られている。しかし、ワスケンの森はライン左岸のフォゲーゼン(Vogesen) 山脈の森のことと解されている[21]のであるから、ライン河を渡る必要はない。確かにそれは矛盾である。そこで写本Cの詩人は919詩節でワスケンの森の代わりにライン右岸にある「オーデンの森」(zem Otenwalde) を入れて地理上正確に改作しているのである。

21)　Helmut de Boor: Das Nibelungenlied, F. A. Brockhaus. における911詩節の脚註を参照のこと。

このように改作者 C は外面的に矛盾を取り除いたり小さなことにまで正確さを要求したりするのであるが、しかし、彼がどのようにして些細なことにまで正確さを要求したのか、その実に念入りな努力は次に挙げる若干の例で最も明白である。

ジーフリトが隠れ蓑を使ってグンテル王に扮しプリュンヒルトと競技をするが、結局競技に負けたプリュンヒルトに向かってジーフリトはこう言う。

«nu sult ir, maget edele, uns hinnen volgen an den Rîn.» (B 474=C 485)

「では貴い姫よ、我々と共にここを立ってラインの国へお越し願いましょう。」

すると、これに対してプリュンヒルトは写本 B ではこう答えている。

«des enmác níht ergân.» (B 475, 1) 「そうはいきません。」

なぜなら、その前に一族郎党のものに申し出る必要がある (B 475=C 486) からである。すなわち、プリュンヒルトは競技の前に交した約束を拒絶しているわけではないのである。だから、写本 C ではプリュンヒルトはより正確に

«des enkan *noch* niht ergân.» (C 486, 1) 「まだそうはいきません。」

というふうに副詞「まだ」(noch) を付け加えて答えているのである。

またそのあとの詩節でジーフリトは船に乗るために——つまり、その船でニーベルンゲンの国へ行こうと思っているのだが——隠れ蓑を身につけて海岸へ行くが、そこにあったその船こそジーフリト、グンテル王ほか2名の仲間がプリュンヒルトの国であるイーゼンシュタインへやって来たのと同一の船であることは自明の理である。ところが写本 B の詩人は次のように述べている。

Dannen gie dô Sîfrit zer porten ûfden sant
in sîner tarnkappen, da er *ein* schiffel vant. (B 482, 1-2)

ジーフリトはそこから海岸にある城門へ、
隠れ蓑を身につけて出かけた。そこに小舟が一艘見つかった。

そこで改作者 C はその船をはっきりさせるために

Sîfrit der vil küene dannen gie zehant
in sîner tarnkappen dâ er *daz* schiffel vant. (C 493, 1-2)

勇士ジーフリトはそこからすぐに隠れ蓑を身につけて
出かけて行った。するとそこにその船が見つかった。

というようにその不定冠詞を定冠詞に置き換えているのである。

またジーフリトがグンテル王に呼び出されたとき、不興げな人々を見てこう尋ねた。

«waz weinent dise vrouwen?　daz het ich gerne erkant,
oder von welchen schulden　mich der künic habe *besant*.»　(B 856, 3-4)

「ご婦人方はなんで泣いておられるのですか。お聞きしたい。
また国王はどういうわけで私をお呼び出しになったのですか。」

ここで注目したいのは „besenden" という動詞であるが、これは身分の高い人によって家来や親族が戦闘乃至宮仕えに呼び集められる際に使われる言葉である。[22] 確かにここでジーフリトは仮の家来となっているので矛盾はないのであるが、しかし宮廷的儀礼を守る改作者 C には好ましくないと思われ、彼は

«waz weinent dise frouwen?　daz hêt ich gerne erkant,
oder von welhen schulden　der künec habe *nâch* mir *gesant*.»　(C 864, 3-4)

というふうに „besenden" の代わりに „nâch senden" を用いているのである。

そしてまたこの叙事詩の最後のあたりでクリムヒルトがハゲネに向かって言う言葉に

«daz truoc mîn holder vriedel,　dô ich in jungest sach.»　(B 2372, 3)

「これ（剣）は私のいとしい夫の見納めの日に夫が携えていたものです。」

という言葉があるが、これは詳しく考察すると正確ではない。なぜなら、クリエムヒルトが最後にジーフリトを棺の中に見たとき、彼は剣を持っていなかったことが明らかだからである。それゆえ、写本 C の詩人は次のように改作しているのである。

«daz truoc mîn holder vriedel,　dô ir im nâmt den lîp
mortlîch mit untriuwen.»　(C 2432, 3-4)

「これ（剣）は私のいとしい夫が不実にもそなたに
殺害されたとき携えていたものです。」

この改作の場合、同時にハゲネに対する反感が強まっていることは重要である。すなわち、彼の行為はここで「不誠実」(untriuwe) な行為として決めつけられている。従って、それに引き続いて起こるクリエムヒルトのハゲネ殺害は内在的には「誠実」(triuwe) の結果でありその表現であると特徴づけられているのである。

このように外面的な矛盾を取り除くためばかりではなく、ハゲネの不誠実を非難すると同時にクリエムヒルトの誠実さを称賛するために改作が行われたということは特記すべきことである。それでは、そのほかの箇所でこのハゲネ及びその共犯者グルテン王そしてその妃プリュンヒルトは写本 C の詩人によって一体どのように改作されているのか、またその彼らの犠牲者であるジーフリトにクリエムヒルトは一体どのように評価されているのであるか、この点に関して以下もう少し詳しく考察してみよう。

22) Friedrich Vogt: Zur Geschichte der Nibelungennlage, 1913. S. 145.

まず改作者 C は写本 B 121 詩節にあるハゲネの形容詞 „starc“ を削除している（C 121）が、これは全く何も意味してはいないと言える。なぜなら、そのほかのところ（C 152, 1; 173, 4; 1852, 1; 2033, 1）では反対にその形容詞を添えているからである。これに似た形容詞として „der küene Hagene“（C 537, 2; 1658, 2）乃至 „Hagene der küene“（C 415, 3; 1448, 2; 1459, 4）そして „der wîse Hagene“（C 1639, 1）などがあるが、これらの形容詞は人物の個人的特徴を示す形容詞ではなく、単なる形式的なものであり、何の意味も有しておらず、さらに容易に交換することのできる類いのものなのである。しかし、次のような改作、„von Tronege Hagene“（B 903, 1; 1001, 1）→„der ungetriuwe“（C 910, 1; 1012, 1）、„des künic Guntheres man（B 984, 4）→„der vil ungetriwe man“（C 993, 4）の場合には、形式的なものを越えて一つの意味を含んでいる特徴的な付加語なのであり、写本 B から写本 C への改作の意図が明白にわかるのである。また改作者 C が写本 B 1281 詩節の „Gewalt des grimmen Hagenen“ における „grimme“ を „übel“（C 1304, 1）に取り換えていることも注目すべき改作である。すなわち、ハゲネは全く極悪非道の人物なのであるが、しかもその際中世ドイツ語の „übel“ は悪魔に添えられる付加語なのである。[23] さらに写本 B 1260 詩節の „der leide Hagene“ を写本 C では „der mordær Hagene“（C 1282, 4）という言い回しに取り換えているのも、ハゲネの価値を下げている改作として注目に値するものである。またハゲネがジーフリトの背中を槍で突き刺したのち、写本Bでは

alsô grimmeclîchen　ze flühten Hagen nie
gelief noch in der werlde　vor deheinem man.　（B 982, 2–3）

ハゲネはこの世の誰からもそのような逃げざまを
したことがないほど、恐ろしい勢いで逃げ出した。

というふうに語られているのであるが、入念な改作者 C はその副詞 „grimmeclîchen“ を „angestlîchen“（C 991, 2）に置き換えている。この改作の副詞は実際ふさわしいものであり、ジーフリトの仕返しに追いつかれはしないかという恐れを示すトロネゲのハゲネの評価を下げていることにも役立っているのである。そしてまたハゲネが司祭をドーナウ河へ突き落とす場面はハゲネの非難をますます強くしていると言える。すなわち、写本 C ではこの場面に 5 つの補足詩節（C 1621–1625）が補われて写本 B よりも詳しく述べられているのであるが、これは宗教的要素を濃くするためというよりはむしろハゲネの行動を全面的に非難するためなのである。その最初の補足詩節にはこう語られている。

Dô des küneges kappelân　daz schif zerhowen sach,
hin wider überz wazzer　er ze Hagene sprach
«ir morder ungetriuwer,　waz hêt ich iu getân,
daz ir mich âne schulde　hie ertrenket woldet hân?»　（C 1621）

23）ヴェルナー・ホフマン：前掲書 S. 122. を参照のこと。

王の司祭はその船が砕かれてしまったのを見たとき、
河越しにハゲネに向かってこう言った。
「不実な人殺しめ！　私がそなたに何をしたというのだ。
そなたは理由もなく私をここで沈めようとしたとは！」

司祭が口にしたこの言葉はまさに改作者 C 自身のハゲネに対する評価の言葉にもなるのではあるまいか。ハゲネに対する非難は、このように改作者 C 自身の考えを登場人物に語らせることによってさらに強くなっているのである。ジーフリトが死ぬ前に直接ブルゴント族に向かって言う次の補足詩節の言葉も、改作者 C 自身の立場を明らかにしているものとして注目に値するものである。

Er rampf sich bitterlîche,　als im diu nôt gebôt,
unt sprach dô jæmerlîche　«der mortlîche tôt
mag iuch wol geriuwen　her nâch disen tagen:
geloubt an rehten triuwen,　daz ir iuch selben habt erslagn.»　(C 1008)

彼は苦しみに堪えがたく烈しく身をもがいて
痛ましくこう言った。「この殺害の死をそなたたちは
後の日にきっと悔やむことになるであろう。そなたたちは
そなたたち自身を殺したのだということを真の誠実にかけて覚えておくがいい。」

ここではさらに „triuwe“ という言葉が用いられているということばかりではなく、この補足詩節に言明されている改作者 C 自身の思考もまた重要である。すなわち、彼らブルゴント族たちは彼らの卑劣な行為のために彼ら自身のちの日に死ぬことになるであろう、否、それどころか彼らはもうすでに死ぬことになっていたのである、言い換えれば、罪は罰をもたらすという改作者 C 自身の考えがここでは要領よく理解されるのである。

改作者 C によるグンテル王の価値づけも全体として同様にグンテル王の罪をより重くするという傾向を示している。写本 C では一度ハゲネとあるところをグンテル王に置き換えることさえあったのである。すなわち、写本 B には

Hagen sîne triuwe　vil sêre an Sîfriden brach.　(B 971, 4)

ハゲネはジーフリトに対して手ひどく誠実を裏切ったのである。

とあるのに、写本 C では

Gunther sîne triuwe　vaste an Sîvride brach.　(C 980, 4)

グンテル王はジーフリトに対して手ひどく誠実を裏切ったのである。

と語られているのである。勿論、この改作はハゲネの罪を軽くするためではなく、むしろグンテル王の罪を重くするために施された改作なのであり、ここで改作者 C は、以前に国王兄弟 3 人がジーフリトに誓った誠実な誓い（写本 C 692＝写本 C 701）のことを考えていたのである。し

かし、グンテル王の罪を重くしていると言える写本 B 887 詩節、すなわち、

«Sô wol mich dirre mære», sprach der künic dô,
als ob er ernstlîche der helfe wære vrô.
in valsche neig im tiefe der ungetriuwe man. (B 887, 1-3)

「それは有難いことです」と国王は、
さながら真面目にこの援助を喜んでいるかのように言って、
この不実な男は偽って低く頭を下げて見せた。

というこの詩節は改作の際写本 C では削除されている。その結果、グンテル王の価値づけにおいては反対の傾向も確認されうるのである。従って、この限りではグンテル王の場合、改作の方向づけは完全に定まっているというわけではない。しかし、包括的に述べれば、グンテル王に対する非難の傾向は明白である。先程挙げた写本 B 887 詩節のためには、写本 B 880 詩節 4 行目 „der künic begonde zürnen, do er diu méré bevant.“（国王はこの報告を聞いて、憤りを発した。）の改作、すなわち写本 C 887 詩節 4 行目 „dô begunde zürnen Gunther, als ob ez wære im unbekant.“（グンテル王は、あたかもそれを知らないかのように、憤りを発した。）がある種の代用を果しているし、そしてまた写本 B 1115 詩節 1-2 行目 „Ez enwart nie suone mit sô vil trähen mê gefüeget under vriunden.“（親族の間で、かくも涙を流して和解がなされた例はかつてなかった。）の改作（写本 C 1128, 1-2）„Ez enwart nie suone mit sô vil trähenen mê mit valsche gefüeget.“（偽って、かくも涙を流して和解がなされた例はかつてなかった。）並びに写本 B には見られない補足詩節（C 1160, 1-3）„Sît daz diu frowe Kriemhilt ouf Gunther verkôs, und doch von sînen schulden den grôzen hort verlôs, dô wart ir herzenleide tûsent stunde mêr.“（王妃クリエムヒルトはグンテル王を赦したのであったが、しかしグンテル王の落度によって多大な宝を失うこととなったので、彼の心の苦しみは千倍にも増したのであった。）をさらにその上に加えるならば、この部分で特徴的なグンテル王の非難を強めていることは十分に明白なのである。

しかし、写本 B においても写本 C においても専ら非難される一方なのはプリュンヒルトである。自分の主人の家来だと思っているジーフリトが、なぜグンテル王のところに伺候しないのか、その募る疑いの念をプリュンヒルトは写本 B においてはこう言葉に表わしている。

«er hât uns nu vil lange lützel díensté getân.» (B 724, 4)

「彼はもう長いこと宮廷に伺候もしていないではないか。」

しかし、写本 C ではこの部分にあたる詩は次のように改作されている。

«daz er uns niht endienet, des wolde ich gerne ein ende hân.» (C 731, 4)

「彼が宮廷に伺候もしないなんて、そんなこと私は絶対に決着をつけてやる。」

すなわち、プリュンヒルトの言葉はもっと攻撃的になっているということが明らかである。この

点に関連づけて写本 B 813（＝C 820）詩節のあとに写本 C の詩人は二つの補足詩節を付け加えてこう語っている。

Dô gedâht diu küneginne　«ine mac niht langer dagn.
swie ich daz gefüege,　Kriemhilt muoz mir sagen
warumbe uns alsô lange　den zins versezzen hât
ir man, derst unser eigen.　der vrâge hân ich keinen rât.»　(C 821)

Sus warte si der wîle,　als ez der tiufel riet:
die fröude unt ouch die hôhgezît　mit jâmer si dô schiet.
daz ir lac amme herzen　ze lieht ez muose komen:
des wart in mangen landen　von ir jâmers vil vernomen.　(C 822)

そこで王妃（プリュンヒント）は考えた。「私はもはや黙っていることができない。
なんとしても私はクリエムヒルトに言わせなければならない。
なぜゆえに私たちの家来である彼女の夫が私たちに
貢物を怠ったのか、そのことを質問せずにはいられない。」

そのようにして彼女は悪魔に魅入られて時が来るのを待ったが、
彼女は歓びと饗宴を悲しみでもって終わらせたのである。
彼女の心に懸っていたものが明白にならざるをえなかったのであり、
それゆえに彼女によって生じた悲しみが多くの国で聞かれたのである。

全体としてプリュンヒルトの非難を強めている補足詩節であると言えるが、さらに彼女のそのあとの行為は悪魔の示唆として特徴づけられている。プリュンヒルトの行動を悪魔の唆しに帰因させることはある種の意味で幾分かプリュンヒルトの罪を軽くすることを意味していることは確かである。しかし、それにもかかわらずプリュンヒルトは悪魔の道具として明らかに価値が落ちてしまっているのである。また写本 B 823 詩節に対して写本 C 832 詩節ではさらに次のように改作されて、プリュンヒルトはその義妹クリエムヒルトとの口論で再び貢物を果さないというモチーフに戻っている。すなわち、

«mich müet daz ich sô lange　niht zins von im gehabt hân.»　(C 832, 4)

「私はもう長いこと彼から貢物を受けていないのが腹立たしいのです。」

という言葉に改めている。このことはその限りではプリュンヒルトの非難を強めていると言えるのではあるまいか。なぜなら、この改作では、ジーフリトはプリュンヒルトに貢物の義務があるのであり、決してグンテル王に対してではないとも解釈することができるからである。

このように写本 B に対して写本 C では一般にハゲネ及びグンテル王そしてプリュンヒルトは否定的により鋭く非難されているのであるが、一方彼らの犠牲者ジーフリト及びクリエムヒルトは肯定的に評価されている。写本 C における補足詩節（973）は次のようにジーフリトを何の欠点もない人物だと称賛し、ブルゴント族の行為を „untriuwe“ だと特徴づけている。すなわち、

Done hête niht der sinne　der küene veige man,
daz er sich ir untriuwe　künde hân verstân:
er was in ganzen tugenden　alles valsches blôz.
sîns sterbes muose engelten　sît der sîn nie niht genôz.　(C 973)

死ぬべき運命にあった勇士（ジーフリト）は
彼らの不実に気がつく気配がなかった。彼は全ての徳において
全くの欠点なしの勇士であった。彼の存在を好ましく思わなかった者（グンテル王）は、
ジーフリト暗殺の罪を償わなければならなかったのである。

ジーフリトを高く評価していると同時にグンテル王を非難している詩節と言うことができるのである。

またクリエムヒルトに関しても改作者 C はその罪を軽くするために至るところで改作を施していると言える。例えば、写本 B 1105 詩節では

sît rach sich wol mit ellen　des küenen Sîfrides wîp.　(B 1105, 4)

やがて猛きジーフリトの妻は、手痛い復讐をば遂げるのである。

と語られているのであるが、改作者 C はこの詩を次のように、クリエムヒルトの行動の決定的な理由、すなわち彼女の態度の根本となっている "triuwe" という動機がはっきりと表われるように改作したのである。

sît rach sich harte swinde　in grôzen triwen daz wîp.　(C 1116, 4)

やがてその妻は真の誠実さから手痛い復讐をば遂げるのである。

この関係で次の補足詩節もまた注目に値するものである。

getriwer wîp decheine　ist uns selten ê bekant.　(C 1159, 4)

かくも誠実な女性は我々にはかつて知られた例がないほどである。

クリエムヒルトの復讐――それに関係のあった者たちばかりではなく、関係のない無数の人たちにまでも影響を及ぼしたクリエムヒルトの復讐は、まさに彼女の罪を重くしなければならないところなのであるが、しかしさらに改作者 C は補足詩節で繰り返して、「クリエムヒルトはジーフリトの暗殺者ハゲネのみに対して復讐を計画していただけであり、他人をそれに巻き込むことは彼女の意図するところではなかった」(C 1882, 1947, 2143) と語ることによって彼女の罪を軽くしようと努めていると言える。ほかの関係で一度取り上げた一詩節を再度ここにその例として掲げることにしよう。

Sine hêt der grôzen slahte　alsô niht gedâht:
si hêt ez in ir ahte　vil gerne dar zuo brâht,
daz niwan Hagene aleine　den lîp dâ hête lân.
dô geschuof der übel tiufel　deiz über si alle müese ergân.　(C 2143)

彼女はそのように大きな戦いを考えもしなかった。
彼女はただ彼女の計画では
ハゲネ一人の命を奪い取りたかっただけなのである。
しかし、悪魔の仕業でそれが全ての者にまで及んだのである。

関係のない者までが復讐の悲劇に巻き込まれたのは悪魔の仕業であると語っているこの補足詩節は、すなわち、その悲劇の原因を悪魔に帰因させることによってクリエムヒルトの罪を軽くすることに役立っているのである。残忍なハゲネの行為をキリスト教的精神から赦すという可能性は、写本Bの詩人の視野にもなかったし、また宗教的傾向の強い改作者Cの視野にもなかった。言い換えれば、少なくとも写本Cにおいてはクリエムヒルトがハゲネに対して復讐するのは正当なのであり、そのために用いた策略もまた復讐の正当な手段なのである。しかし、クリエムヒルトがそれ以上のことをしてしまったということは、悪魔がもたらしたものの結果なのである。同じように、クリエムヒルトの息子オルトリエプが犠牲となる場面でも、クリエムヒルトは改作によってその罪を軽くされていると言うことができる。すなわち、写本Bにおいては

Dô der strît niht anders　kunde sîn erhaben
(Kriemhilt ir leit daz alte　in ir hérzen was begraben,)
dô hiez si tragen ze tische　den Étzélen sun.
wie kunde ein wîp durch râche　immer vreislîcher tuon?　(B 1912)

戦いを始めるのに他に方法とてはなかったので、
(クリエムヒルトの胸中には古き怨恨が根を張っていたのだ)
彼女はエッツェル王との間に出来た息子を食卓に連れてこさせた。
婦人にして復讐のためにかくも恐ろしいことを誰がなしえたか。

このようにクリエムヒルトの行為は非難するには十分なものであり、自分の立場に控え目な写本Bの詩人は力をこめてクリエムヒルトの有罪を宣告していると言うことができるのであるが、しかし、一方写本Cの詩人にとってのクリエムヒルト像は、写本Bの詩人によって考えられているクリエムヒルト像とは相容れないものであり、それゆえに改作者Cはそのクリエムヒルトにとって不利な写本Bの詩節を次のように改作しているのである。

Dô die fürsten gesezzen　wâren überal,
unt nu begunden ezzen,　dô wart in den sal
getragen zuo den fürsten　daz Ezelen kint:
dâ von der künec rîche　gewan vil starken jâmer sint.　(C 1963)

主君（ブルゴント族）たちは至るところにすわって今や食事を始めた。
そこでエッツェル王の子供が主君たちのところへ
連れて来られた。そのために勢威ある国王（エッツェル）は
のちに手痛い苦しみをば受けることとなったのである。

すなわち、クリエムヒルトに不利な点は削除され、そのことによってクリエムヒルトの罪は軽く

されていると言うことができるのである。

以上、「ニーベルンゲンの歌」における重要人物たち、中でも特にハゲネとクリエムヒルトの行為を中心として、深く意味解釈にまで介入する詩人Cの改作を明示してきたわけであるが、ここで以上をまとめてみると、要するに、自分の立場に控え目な態度をとっている写本Bの詩人に対して、写本Cの詩人は自ら改作を施すことによって彼独自の立場を構築していると言える。すなわち、ハゲネを絶対的に否定し、それと同時にクリエムヒルトの立場を全面的に擁護することによって、かつて写本Bの詩人が十分明らかに語ることのできなかった悲劇の原因と償いとをここで合理的・モラル的に明らかに示そうと試みているのである。言ってみれば、「ニーベルンゲンの歌」改作Cは、写本Bで成就されている悲劇的世界観に対して、それとは異なった自らの世界観を展開してゆく試みなのである。すなわち、写本Bにとってその特徴としてまさに本質的であるもの——宿命と原因とが複雑に絡み合って真の悲劇として現われているもの、言い換えれば、罪と罰との動機が確かにないわけではないが、しかしあらゆる動機をも凌ぐ暗い「運命」の力がそこでは全く支配的であるということ、このニーベルンゲン悲劇の中に超現世的な「運命」の力を見る写本Bの悲劇観は、写本Cの詩人にとっては相容れないものなのであり、彼はその悲劇的な世界を合理的・モラル的なものへと解明してゆこうと試みているのである。確かに写本Cの詩人はその悲劇的基盤から離れることができなかったのであるが、しかし彼はそれを広範囲にわたってやわらかくしていったのであり、そしてその上に彼自身のモラル的解釈をいわば「つぎ木」したのである。従って、写本Cは二つの写本のうちでどちらかと言えば「より中世的」なものである。すなわち、その作品が、ニーベルンゲン悲劇を人間の過失の結果として合理的・モラル的に説明するために、英雄主義的・悲観主義的世界観を制限しようとしたことによって、「より中世的」な作品であると言うことができるのである。

5. 「哀歌」の特徴

「ニーベルンゲンの歌」写本Bの英雄主義的・悲観主義的世界観に反対の声を表現したものとして写本Cのほかに「哀歌」が挙げられる。この「哀歌」という作品が「ニーベルンゲンの歌」写本Cと多くの重要な一致を示しているということは、すでに上でも述べたことであるが、特にクリエムヒルトを弁護する傾向とハゲネを非難する傾向の点で一致しているということは、ここで特筆すべきことである。すなわち、「哀歌」では、「ニーベルンゲンの歌」写本Cと同じように、クリエムヒルトは „triuwe“ から復讐を成し遂げた (z. B., V. 156-158) のであり、その復讐の行為も正当なものである (z. B., V. 138) という確信が至るところで述べられているのであり、またそれと同時に「哀歌」は繰り返し全ての原因をハゲネに押しつける努力 (z. B., V. 1253, V. 1300-1301) をしていると言うことができるのである。しかもその場合、クリエムヒルトを擁護しハゲネに全ての原因を押しつける傾向は「ニーベルンゲンの歌」写本Cにおいてよりも「哀歌」においての方がより鋭くより執拗に描写されていると言える。このことは、例えば、「ニー

ベルンゲンの歌」両写本ではクリエムヒルトが「鬼女」(vâlandinne) と呼ばれている (B 1748, 4 =C 1789, 4 及び B 2371, 4=C 2431, 4) のに対して、「哀歌」ではハゲネが「悪魔」(vâlant, V. 1250) と呼ばれ、さらに大惨事の原因がハゲネの高慢さ (übermuot, V. 4031) であると語られていることからも明らかであるし、また「ニーベルンゲンの歌」両写本においてヒルデブラントがクリエムヒルトを打ち殺すことに対して、「哀歌」の詩人は次のように語っていることからも明らかなのである。

daz was diu küneginne,	それは王妃（クリエムヒルト）であった。
die mit unsinne	不実にもヒルデブラントが
het erslagen Hildebrant. (V. 731-733)	彼女を打ち殺したのである。
…	…
durh daz verlôs ouch si den lîp	そのために彼女はヒルデブラントから
von Hildebrande âne nôt. (V. 750-751)	理由もなく殺されてしまったのである。

すなわち、クリエムヒルトが理性のない (mit unsinne) ヒルデブラントに殺されたのは謂われのないことなのであり、「哀歌」の詩人自身次のように確信していたのである。

Swer ditze mære merken kan,	この話を本当に知っている人は、
der sagt unschuldic gar ir lîp,	彼女のことを無罪だと言うであろう。
wan daz daz vil edel werde wîp	なぜなら、この高貴な女性は
tæte nâch ir triuwe	彼女の誠実さから
ir râche in grôzer riuwe. (V. 154-158)	その復讐を成し遂げたからである。

そして、誠実さから行動する人に関しては「哀歌」の詩人は次のことをも確信していたのである。

sît si durch triuwe tôt gelac,	彼女は誠実さのために死んだのであるから、
in gotes hulden manegen tac	神の恩恵の中で多くの日々を
sol si ze himele noch geleben.	彼女は天国でなおも生きることができるのである。
got hât uns allen daz gegeben,	神が我々全員に約束していることによると、
swes lîp mit triuwen ende nimt,	その生が誠実で終わる者は
daz der zem himelrîche zimt.	天国へ行くのにふさわしいからである。
(V. 571-576)	

「ニーベルンゲンの歌」の「鬼女」はその誠実さのために「哀歌」では永遠の至福をかち得たのである。クリエムヒルトの行為に関してこれほど鋭く解釈を変えているものはほかには考えられない程である。このように「哀歌」においてはクリエムヒルトを強く支持する傾向がより鋭くなっているわけであるが、それと同時に悲劇の張本人であるハゲネの行動に対する非難も一段と鋭くなっている。「哀歌」におけるルーモルトはこの絶対的な非難を次のように要約している。

«mîne herren die hân ich verlorn	「私は主君たちをただハゲネの高慢さゆえに
niwan von Hagenen übermuot;	失ったのだ。高慢はしばしば

diu dicke grôzen scaden tuot.	大きな悲しみをもたらすものだ。
do er Kriemhilde nam ir man	ハゲネがクリエムヒルトから
und ir ir guot an gewan	彼女の夫の命と財産とを
in grôzen untriuwen,	不実にも奪い取ったとき、
ich sah ez an ir riuwen,	私は彼女の悲しみでわかったが、
swie siz ane getrüege,	彼女は何が起ころうと
daz man si drumbe slüege,	彼ら（ハゲネとグンテル王）を
swenne iz ouch geschæhe.	殺すことを考えていたのだ。
Hagen ir manege smæhe	ハゲネは常に理由もなく
zir scaden âne schulde erbôt	彼女に損害を与えたばかりではなく、
zallen zîten âne nôt;	多くの罵りの言葉を吐きかけたが、
des er niht tuon solde,	それを人が注意しようとしたとき、
ob manz merken wolde:	ハゲネはそういうことをすべきではなかったのだ。
wand es was im gar ze vil;	それは、彼女にはあまりな行為であり、
darumbe ihz ir niht wîzen will.	それゆえ私はクリエムヒルトを責めるつもりはない。
waz het Sîfrit, ir man,	彼女の夫ジーフリトが
im ze leide getân?	ハゲネに何をしたというのだ。
der wart âne schulde ermort.»	ジーフリトは謂われもなく殺害されたのだ。」

(V. 4030-4049)

しかし、「哀歌」はさらに「ニーベルンゲンの歌」写本Cを超えて、ニーベルンゲン悲劇を、専らブルゴント族の主君たちから承諾を得て行動した残忍なハゲネに対する罪——神の正当な「祟り」として解釈しようと努力しているさまが明らかである。「哀歌」の詩人はヒルデブラントを通じてその大惨事に関する自分自身の見解を述べていると言えるのである。

«ine kan mihs anders niht verstên,	「選り抜きの勇士たちは
wan daz die helde ûz erkorn	恐ろしい神の怒りを
den vreislîchen gotes zorn	今や長い間得ていたとしか
nu lange her verdienet hân.	私には理解できません。
done kundez langer niht gestân	神の怒りは、もはや一日として待てず、
über ir zil einen tac:	今や大爆発し、
dô muosen si den gotes slac	彼らはその高慢のゆえに
lîden durch ir übermuot.	神の一撃を被らなければならなかったのです。
des ligt hie manec helt guot,	そのため多くの勇士がここに倒れているのです。
der in manegem sturme herte	彼らは激しい多くの戦いで
sich dicke wol erwerte,	しばしば生き延びてきたのですが、
und sint nu hie erstorben.	今やここに殺されてしまっています。
daz hânt si in selbe erworben.»	彼らは自ら死を得たのです。」

(V. 1270-1282)

ここで語られていることは、「ニーベルンゲンの歌」改作者Cがその補足詩節（C 1008）——前述

286頁参照のこと――でジーフリトに死の前の最後の言葉として口に出させたもの、すなわち、「そなたたちはそなたたち自身を殺したのだということを真の誠実にかけて覚えておくがいい」という言葉を思い起こさせる。「哀歌」においても、彼らは彼ら自身を殺した、言い換えれば、罪は天罰をもたらすという考えがここで要領よく理解されるのである。

このようにクリエムヒルト側を全面的に擁護しハゲネ側を絶対的に非難する一方、また「哀歌」の詩人にとって特別な関心は、エッツェル王の性格をキリスト教的意味において浄化することである。戦いで倒れてしまったブルゴント族たちにも、また残忍なハゲネ（V. 1283-1294）にも対するエッツェル王の嘆きは驚くほどにまで達している。ブルゴント族が結局彼の敵であり、そして彼の息子をも殺害し、多数の家来を殺してしまったということはもはやエッツェル王の頭の中にはない。彼は異教徒であったけれども、敵であれ味方であれ、死んだ者への憐れみは大きかった（swie si wæren heiden, doch was zerbarmen umbe sie., V. 874-875）のであり、彼の敵だとはいえ、彼は彼の敵をも嘆かずにはいられなかった（nune mac ich ungeklaget lân niht den mînen vîant., V. 1226-1227）のである。エッツェル王は自分の弟ブレーデリーンの亡骸に向かってこう叫んでいる。

«du tæte ungüetlîchen,	「愛する弟よ、お前は
vil lieber bruoder, ane mir.	私に悪いことをしてくれた。
swie sold ich getrouwen dir	お前が、私の客人である
daz du mînen gesten,	りっぱな勇士たちの心を怒らせ、
degenen aller besten,	そのために彼らがりっぱな勇士のお前を
ie erzurndest den muot,	打ち殺したなんて、
daz si dich, mære helt guot,	一体私はお前を
dâ von ze tôde hânt erslagen?	どのように信じたらよいのか。
die selben helde muoz ich klagen,	彼らをも私は嘆かなければならないのだ。
wand ich in hête gesant	なぜなら、この私が
mîne boten in ir lant,	彼らの国へ使者を遣って
daz si mich sehen solden. (V. 892-903)	私を訪問するように取り計らったからだ。
…	…
daz ir Hagene het getân,	ハゲネがクリエムヒルトに成したことは
des weste ich wol diu mære:	私もよく存知ている。
swie liep si mir wære,	たとえ彼女が私にとって可愛くあっても
ich het in nimmer doch erslagen.	私は決してハゲネを打ち殺しはしないだろう。
ob er vor mir ze tûsent tagen	たとえハゲネが私のところで
solde han geslâfen,	千日間滞在していたにしても、
sone het ich mîn wâfen	私は決して彼に
nimmer über in erzogen.» (V. 922-929)	私の武器を向けなかったであろう。」

「汝の敵を愛せよ」（Liebet eure Feinde！）という戒律がこの異教徒には非常なまでに満たされ

ているように思われるとフリードリヒ・パンツァー[24]も述べている。ヴェルナー・ホフマン[25]の言葉を借りて言えば、ここで「哀歌」は「キリスト教的・モラル的教本」(eine christlich-moralische Lehrdichtung) となっているのである。この点からある程度推測できることは、フリードリヒ・パンツァー[26]も推定しているように、「哀歌」の詩人は恐らく宗教家 (Geistlicher) であったろうということであり、少なくとも彼は偉大な悲劇詩人ではなかったのである。絶え間ない嘆きの繰り返しと過度な嘆きの表現が「英雄文学」とはかなり異なった性質のものにしている。「哀歌」の詩人が、「ニーベルンゲンの歌」写本Bの悲劇詩人とはかなり離れた存在にあったということは、「哀歌」の詩人が古代ゲルマンの英雄ジーフリトをただ副次的な人物——クリエムヒルトを擁護するための単なる一人物として、しかも名前が挙げられている程度に過ぎないというテクスト上の事実からも明白である。「哀歌」においてジーフリトはもはや古代ゲルマンの不死身の英雄なのではなく、単なるクリエムヒルトの亡夫でしかないのである。このように古代ゲルマンの本質的な遺産は踏襲せずに、単なる悲劇の結果として戦場に倒れている死者たちをキリスト教の立場より嘆き悲しんだという点で、この「哀歌」は純粋に「中世的」なものとなっているのである。

結　　び

以上考察してきたように、「ニーベルンゲンの歌」写本Bは写本Cにおいて深く意味内容にまで介入する改作を施された、言い換えれば、写本Cはその手本である写本Bに成就されている悲劇的世界観に対して、それとは異なった独自の世界観を合理的・モラル的に展開してゆくことを試みたのである。従って、そこからほとんど疑いなく確認されることは、写本Bと写本Cは同一人物の詩人による作品ではないということである。

まず「ニーベルンゲンの歌」写本Bの詩人は、出来事を彼のモラル的な判断でもって描いてゆくことを拒んではいない。しかし、彼は非常に控え目に、そして何よりもまず中立的な立場をとり、あらゆる側から正当性を打ち出す努力をしている。写本Bの詩人はクリエムヒルトの誠実さを認めながらも、しかしクリエムヒルトの復讐の行為を明らかに否定しているのである。

これに対して写本Cの詩人は、クリエムヒルトの行為を弁護し、それと同時にハゲネの行為を絶対的に非難しようと努めている。しかし、この傾向は「哀歌」においてはますます鋭くなっている。

従って、この限りにおいて「ニーベルンゲンの歌」と「哀歌」との内的関係——すなわち、クリエムヒルトを弁護し、ハゲネを否定する傾向を視点とした両者の内的関係は、ただ写本B→写本C→「哀歌」という順序においてのみ見られうる。しかし、これらの作品の内的関係にそれら

24) フリードリヒ・パンツァー：前掲書 S. 83.
25) ヴェルナー・ホフマン：前掲書 S. 138.
26) フリードリヒ・パンツァー：前掲書 S. 90.

の年代学的関係を結びつけてはならないであろう。この内的関係は必然的に時代的連続の表現である必要はないからである。もし両者の関係を同じものとして取り扱うなら、それは危険でさえあるのである。しかし、その年代決定の問題のためには、厳密な意味における文献学的な批判を顧みるべきだということばかりではなく、作品の意味内容――他の作品とのある一定の関係の表現でもある意味内容を明らかに示すことを試みなければならないという視点は正当であろう。この視点に立って今後さらに詳しい考察が必要であるが、とりあえず本稿では、この三つの作品の相対的年代順並びに成立年代決定の問題は、残念ながら未解決のままにしておかざるをえない。

しかし、これらの作品の決定しがたい成立年代を推定することよりも本稿で考察しておきたかったのは、「ニーベルンゲンの歌」写本 C の詩人及び「哀歌」の詩人がそれらの作品を作り上げたとき、彼らはなぜ改作乃至詩作したのか、換言すれば、それらの作品は英雄主義的・悲観主義的性格の強い写本 B に対してどのような特質を有しているのか、そのことを明示することだったのである。すなわち、「ニーベルンゲンの歌」写本 C 及び「哀歌」の二つの作品は、「ニーベルンゲンの歌」写本 B に見られる世界観――悲劇が宿命的な運命と罪との複雑な絡み合いの中で展開するという世界観――とは反対に、悲劇は人間の過失であり、その罪に対しては遅かれ早かれ正当な天罰が下されるという世界観を展開しようと試みているのである。要するに、「ニーベルンゲンの歌」写本 C は、悲劇が人間の過失、人間の罪の結果であるとして合理的・モラル的に説明するために、英雄主義的・悲観主義的世界観を制限しようとしたことによって、写本 B よりは「より中世的」なものであり、さらに「哀歌」はキリスト教的要素が多分に取り入れられることによって純粋に「中世的」なものとなっていると言うことができるのである。

(1979・9・25)

※本稿執筆にあたり「ニーベルンゲンの歌」写本 B の邦語訳に関しては、相良守峯氏の訳（岩波文庫）を参照させて頂き、それと同時に固有名詞の発音に関しても氏の岩波文庫版に合わせて――すなわち、だいたいは中世ドイツ語の発音に従って表示したが、日本人にとっても一般的に知られている名称（例えば、リーン→ライン、トゥオナウウェ→ドーナウなど）は現代の発音に従って――表示させて頂いたこと、並びに写本 C の邦語訳に関しては、服部正己氏の訳（東洋出版社）を参照させて頂いたことを最後に付記しておきたい。

〔資料 I〕　Walther von der Vogelweide: Der Hof zu Thüringen

Der in den ôren siech von ungeschichte sî,
daz ist mîn rât, der lâze den hof ze Düringen frî:
wan kumet er dar, dêswâr er wirt ertœret.
ich hân gedrungen, unz ich niht mê dringen mac:
ein schar vert ûz, diu ander in, naht unde tac.
grôz wunder ist daz iemen dâ gehœret.

der lantgrâv' ist sô hôchgemuot,
daz er mit stolzen helden sîne habe vertuot,
als iegeslîcher wol ein kempfe wære.
mir ist sîn hôhiu fuore kunt:
und gulte ein fuoder guotes wînes tûsent pfunt,
dâ stüende ouch niemer ritters becher lære.

不運にも耳を煩っている者は、
私の忠告ですが、チューリンゲンの宮廷を去るのがよい。
そこへ行くと気違いになるというのは本当のことゆえ。
私も押し寄せましたが、もはや押し寄せることができない程。
昼夜区別なく群衆が出て行ったかと思うとまた別の群衆が押し寄せて、
そこで聞くものと言えば本当に驚くべきものなのです。
方伯ときたら、とても意気盛んな方ゆえ、
勇士たちとともに自分の財産を使い果してしまう仕末。
そのさまはまるで各人が選り抜きの騎士であるかのようです。
私は彼の気高い生活方法をよく知っています。
良質のワイン１フーデルとなると大変高価なものですが、
騎士の盃は空になったことがありませぬ。

〔資料 II〕 Wolfram von Eschenbach: Parzival (Buch VI)

von Düringen fürste Herman,	チューリンゲンのヘルマン殿、
etslîch dîn ingesinde ich maz,	あなたの家来の中には
daz ûzgesinde hieze baz.	家来と言えない者がいますぞ。
dir wære ouch eines Keien nôt,	あなたにはケイエのような方が必要でしよう。
sît wâriu milte dir gebôt	なぜなら、あなたの本当の気前よさのために
sô manecvalten anehanc,	ある時は卑しい群衆が
etswâ smæhlîch gedranc	またある時は高貴な群衆が
unt etswâ werdez dringen.	さまざまに押し寄せてくるのですから。
des muoz hêr Walther singen	だからヴァルター殿も歌ったのです。
„guoten tac, bœs unde guot."	「今日は、悪しき方々に善き方々よ」と。
(297, 16-25)	